

『Yちゃんが生きた証』

私も2人の娘がそれぞれ中学生と小学生となり、父親として我が子が可愛く、何物にも変えられない財産となった。道端で親が子をあやす場面を見ると、過去を振り返っては心が和み、また、テレビや新聞で、子供が病気になったり、事故にあったりといった悲しいニュースを目にすると、親の立場で考え、よりいっそう心を痛めるようになった。

今から10数年前、大学病院時代であるが、小児科から骨髄移植の依頼があった。11歳のYちゃんは、3年前に急性白血病を発病し、化学療法（抗がん剤治療）により一度は完全寛解というあたかも治った状態になったものの、その後は再発と寛解を繰り返していた。もはや、Yちゃんを救うには骨髄移植という方法しか無いと思われ、幸い兄が骨髄提供者（ドナー）として適格であったため、私たちに移植の依頼が来たのである。

ある日、まだ小児科病棟にいるYちゃんと両親と初めて会った。Yちゃんは、一見、どこにでもいる10歳そこそこの少女だったが、何となく、大人びた表情を私たちに見せていた。彼女は、3年間という長い間、大変な病気を抱え、ほとんど学校にも通うこともできず、ひたすら抗がん剤による治療を受けていた。私たち大人ですら体験したことのない厳しい状況に置かれ、Yちゃんは大人以上に強くならなければならなかったのだろう。

傍に寄り添う両親の表情には不安と疲労感がにじみ出ている。母親はほとんど家を空け、Yちゃんとともに病院で過ごす時間が多かったのだと思う。Yちゃんを中心に、家族みんながお互いに犠牲を払い、助け合いながら、必死に生きている。そんなことを思うと、何が何でも助けよう、と余計に力が

こもった。

1ヶ月後、予定通り、兄から骨髄を採取し同種骨髄移植を施行した。Yちゃんは母親とともに無菌室で過ごしながら、大変な治療を乗り越え、移植は大きな問題も無く、成功のもとに終わった。移植から4ヶ月後、Yちゃんは何年ぶりかに元気に退院した。自分の家に戻り、また学校に行き友達と一緒に勉強したり、遊んだり出来る。家族とともに色々な夢が広がっていたはずである。しかし、ようやく見え始めた希望の光は、白血病の再発という形で、また闇の中に隠れてしまった。退院してから2ヶ月後であった。

大きなショックの中、Yちゃんや家族のことを考えると、これであきらめるわけには行かなかった。化学療法、さらには兄のリンパ球を追加注入する免疫療法を行うなど、考えられる治療を次々に行った。前のように再発と寛解を繰り返しながらの日々が続いた。寛解になった時は、一時的に退院することができた。その時は、母親と一緒に外来を訪れ、元気な姿を見せてくれた。束の間のほっとできる時間であった。

しかし、もはや、Yちゃんの体力は度重なる厳しい治療により限界が来ていた。ある日、肺炎に罹り、何回目かの再入院となった。Yちゃんももう13歳になっていた。肺炎がなかなか改善しない中、追い討ちをかけるように白血病は再発し、数ヶ月後、皆の願い空しくYちゃんはずいぶん力尽きた。約5年間の闘病生活を終え、骨髄移植から1年半後、家



族の見守る中、あまりにも短すぎる人生に幕を下ろした。家族はもちろん、私たちスタッフも涙が止まらなかった。

振り返ると、その1年半、あれだけの辛い症状、そして厳しい検査や治療の中、Yちゃんが泣いたり、叫んだりした場面はほとんど見る事が無かった。時には注射をする時に口をつぐんで、そっぽを向いてしまうようなことはあったにせよ、それもめったに見られることでは無かった。Yちゃんはずっとどんな思いでいたのか、彼女の口からは聴くことはできなくなった。でも、きっと子供心に、母親を初めとする家族の辛そうな顔を見ては、悲しませない、困らせないようにと振舞っていたに違いない。私たちスタッフにも迷惑をかけまいと思っていたに違いない。大人にもなかなか真似のできないころの強さを感じた。

クリスマスカードを渡した時の、無邪気なYちゃん的笑顔が忘れられない。お互いに病気のことを忘れられた一瞬であった。あれから10年経った。今は、命が軽んじられているような信じられない出来事があまりにも多過ぎる時代となってしまった。子供たちには、命の重み、大切さを感じて欲しい。そのためにも、短かったけれど、一生懸命に生き抜いたYちゃんのことを伝えていきたい。それが私にとっての、彼女が生きた証なのだから。Yちゃん、ありがとう。

